

聖書：ヨハネの黙示録 22：6～13

説教題：ますます聖なる者と

日時：2021年11月28日（朝拝）

ヨハネの黙示録は今日見る 22 章 6 節から結びの部分に入ります。1 章 1～8 節が序論で、1 章 9 節～22 章 5 節までが本論でした。その本論は一言で言えばキリストの復活から再臨までの歴史はどのように進むかを繰り返し幻を通して啓示するという内容でした。そのクライマックスとして 21 章～22 章 5 節にかけて新しい天と新しい地の様子が描かれました。栄光に輝く神の都、完成した教会の姿が描かれました。これらのすべてを受けて御使いは 6 節で「これらのことばは真実であり、信頼できます」と言っています。ヨハネの黙示録の結びに当たって、これまで見て来たことは完全に信頼できるものであり、全く寄りかかって良い言葉であると。なぜそう言えるのでしょうか。それは預言者たちに霊を授ける神である主が、御使いを遣わしてしもべたちに示されたものだからと言われています。神は旧約時代でも新約時代でも預言者たちに霊を授けて、ご自身の御心を啓示して来られました。ここの「霊を授ける」とはいわゆる聖書の靈感について語っているものです。ペテロの手紙第二 1 章 21 節：「預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」この霊を授ける神によって、この黙示録も与えられたということを御使いは言っています。つまりこのヨハネの黙示録は、聖書に収められている他の神の靈感による書物と同じレベルの神のことばであるということです。その神が御使いを通して、しもべたちに示された。ここは黙示録冒頭の 1 章 1 節と対応しています。この結び（エピローグ）は序章（プロローグ）と多くの点で対応しています。黙示録 1 章 1 節：「イエス・キリストの黙示。神はすぐに起こるべきことをしもべたちに示すため、これをキリストに与えられた。そしてキリストは、御使いを遣わして、これをしもべヨハネに告げられた。」ここにこの啓示は神からキリストへ、キリストから御使いへ、御使いからヨハネへ、ヨハネからしもべたちへという順序で示されたと言われていました。そこでは確かに御使いが重要な位置を占めています。今日見ている 22 章 6 節もそうです。御使いが仲介しています。そして心に留めるべき大切な点は、それが「しもべたちに」と言われていることです。これは聖徒たち全員のことです。1 章 1 節を見た時も述べましたが、黙示録はある一部の人のための秘密の書ではないのです。クリスチャン全員に向けて書かれました。私たち皆が受け止め、理解し、ここから益を得るためのものとして与えられています。

次にこの黙示録のテーマは何だったのでしょうか。6 節に「すぐに起こるべきこと」とあります。1 章 1 節でも同じことが言われていました。この「すぐに起こるべきこと」という言葉を見て多くの人は、すぐに起こることだから 10～20 年の間に起こること、少なくとも 100 年以内に起こることではないかとイメージするかもしれません。しかしこの黙示録は今から 1900 年以上前に記された書です。ですからまずその最初の読者たちにとって、これはどういう意味を持つ言葉だったかを良く考えなければなりません。1 章 1 節を見た時にも述べましたが、これは旧約聖書のダニエル書と深い関連がある言葉です。ダニエルは後の日に関する神の幻を説き明かしました。地上の国々は過ぎ去り、やがて永遠の国が来るということについてです。ダニエル書では「終わりの日に起こること」と言われていました。その終わりの日がついに始まったというのが、このヨハネが生きていた時代でした。救い主キリストが地上に来られ、十字架のみわざを成し遂げて復活し、天に昇り、全世界を支配する方とされました。そこにおいて神の国、神の支配がこの世界に実現し始めるという神の計画の最終段階に入ったのです。この世界の歴史の言わば最終章にどんなことが起こるかについて黙示録は語って来ました。そしてそのクライマックスとして主の再臨があります。7 節：「見よ、わたしはすぐに来る。」 ここにおいて神のご計画はついにゴールに達するのです。

ある人は「すぐに来る」と言われているが、すでにイエス様が天に昇ってから 2000 年近く経つのに、これをどう理解したら良いのかと思うかもしれません。しかし先に述べたようにこれは単に時間を数字的な面から考えて論じるべきものではありません。約束のメシヤが地上に来て、復活し、昇天し、天から聖霊を注ぐペンテコステの出来事が起こりました。使徒の働き 2 章でペテロがヨエル書の言葉を引用して語ったように、その出来事において旧約聖書が預言して来た「終わりの日」「終わりの時代」は開始されました。ではその後待っているプログラムは何でしょうか。後はもう主の再臨しかありません。それはいつ地上に臨んでもおかしくありません。そういう意味でその日はいつも近いのです。準備していない者にとってその日は思わぬ時に、不意を突かれるようにして起こるのです。

ですからその日を見据えて「この書の預言のことばを守る者は幸いである」と 7 節に言われています。これも冒頭の 1 章 3 節に対応しています。1 章 3 節：「この預言の

ことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。時が近づいているからである。」 主の再臨の日がいつでも臨み得る今日、終わりの日に関することを述べているヨハネの黙示録を読むことができることは私たちにとって大いなる幸いを意味します。1 回目の説教は「黙示録を読む幸い」と付けました。そしてその時も申し上げましたが、ただ読むだけでなく、そこに生きることが大事です。頭で知るだけでなく、ここに言われていることを守って生きる人。その人こそ真に幸いな人、神の祝福を受ける人、神の救いを受ける人なのです。

さて御使いの証言に加えて 8 節ではヨハネの証言も加えられています。「これらのことを聞き、また見たのは、私ヨハネである」と。先に見た通り、神は御使いを通して黙示録の啓示を与えましたが、御使いからそれを受け取ったのは使徒ヨハネでした。これを受け取り、ここに記したのは私であるとヨハネは証言しています。その彼はここで、これらのことを自分に示してくれた御使いの足元にひれ伏して礼拝しようとした時のことについて述べます。そして御使いから 10 節で「いけません」と言われま。ほとんど同じことが 19 章 10 節にもありました。ヨハネはまたしても同じ過ちを繰り返してしまったのでしょうか。これはそれだけヨハネが受けた幻が素晴らしかったということでもあったのでしょうか。特に 21 章から 22 章 5 節にかけて、圧倒されるような天国についてのメッセージを彼は聞きました。それで思わず御使いを礼拝してしまいそうな態度を取ってしまった。しかし御使いから「神のみを礼拝しなさい！」と言われたと言います。これは当時、御使いに対する礼拝が行われていて、それを正すためのものだったのではないかと言う人もいます。また新約聖書にはパウロやバルナバが宣教地で危うく礼拝されそうになり、急いで拒否したというエピソードも載っています。神の素晴らしいメッセージを取り次ぐ時、それを取り次ぐ器をあがめてしまう誘惑が人にはあるということでしょうか。しかしそうであってはならない。御使いや人ではなく、神こそを礼拝しなければならないと言われています。

さて今日の箇所の後半となる 10 節以降を見ます。御使いはそこで「この書の預言のことばを封じてはなりません」と言います。これもダニエル書と深い関係がある言葉です。ダニエルは終わりの日に関する幻を受けましたが、その詳細が良く理解できませんでした。そこでダニエル書 12 章 8 節でこのように尋ねました。「私はこれを聞いたが、理解することができなかつた。そこで私は尋ねた。『わが主よ、この終わりはどうなるのでしょうか。』」 それに対してこのような返答があったと次の 9 節にありま

す。「彼は言った。『ダニエルよ、行け。このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。』」 この終わりの時まで秘められ、封じられているとは、その時まで明らかにされず、十分理解することはできないという意味でしょう。しかし今や御使いは「この書の預言の言葉を封じてはならない」と言います。それはその後にあるように「時が近いから」です。今や歴史の最終段階にあるからです。神の計画が最終的に実現する直前の時代だからです。ですからこの黙示録を多くの人に明らかにし、伝えよ！とされています。

続いて 11 節に「不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」とあります。これは福音が語られるところに生じる 2 つの結果です。参考になるのはイザヤ書 6 章 9 節の言葉です。主はイザヤを派遣する時、こう言われました。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と」。神のことばはもちろん、人々がこれを聞いて祝福を得るようにとの目的で語られます。しかしある人は神のことばを退けます。むしろ神のことばに接して心を頑なにし、益々神とは反対の道へ進んで行きます。そこにおいてその人は自分自身の性質をより露わにするのです。それと同じことがここに言われていると考えられます。このみことばによると人類は 2 種類に分かれます。せつかくの啓示である黙示録のメッセージを聞いても、ある人は心を頑なにし、益々不正を行い、汚れた者となる道へと進んで行く。一方、これに聞く人はどうなるでしょう。その人は主に信頼し、主と結び付き、主の力によって、益々正しい歩み、また主に倣う益々聖なる者とされて行きます。これは黙示録のメッセージに聞き、これを守る歩みを通して、その人の上に生じる祝福です。

そして 12 節にもう一度主がすぐに来られること、主の再臨の日は近いことが述べられます。ここで強調されているのは行いに応じた報いがあるということです。これはもちろん行いによって救われるか救われないかが決まるということではありません。聖書は救いはただ神の恵みによること、ただ信仰を通して与えられることを述べています。しかしそれは信じると口で告白すれば生活はどうでもいいという意味ではありません。私たちは行いによらず、ただ信仰によって救われますが、一方でもし本当に主と結ばれているなら、主と結ばれている者らしい実が現れて来なければならないとも聖書は語ります。行いは救いの条件や基礎ではありませんが、救いの結果であ

り、また証拠です。行いに現れない信仰など持っていて何の意味があるかというヤコブの言葉が思い起こされます。もちろん地上にある間の私たちの行いは常に不完全で、あらゆるところに罪が染み込んでいます。しかし主への信仰から出て来る行いを神は喜び、尊んでくださり、汚れたところは主の十字架を通してきよめて受け入れてくださいます。そして主はかの日にそこに見られる良きものを認めて、それに報いると言っています。不完全であっても、そこに信仰が生きたものであることの証拠を見て取って、ふさわしい実りがあることを見て取って、それを称賛し、報いてくださるので、す。ですから私たちは改めて「行いに現れる信仰」を求めなければ！と思わされます。主キリストとつながり、主キリストのいのちに生かされていることが、私たちの日々の生活に具体的に現れ出るものであるように！と。名ばかりで、実質のない、偽りのクリスチャンであることがないように！と。

最後 13 節に「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」とあります。これまでも繰り返し出て来た表現です。これは主こそが主権者であり、世界の歴史の支配者であることを述べたものです。主はそのような方として「すぐに来る」という約束を必ず果たされますし、行いに応じて報いるということも確かに行われるのです。

今日の箇所を通して私たちは自分たちが歴史の最終ステージにあることを改めて覚えさせられます。旧約から約束されてきたメシヤが来られ、十字架、復活、昇天を成し遂げ、残るプログラムはあと主の再臨のみです。とは言え、その最後のイベントが起こるまでには様々なことがあるというのも事実です。この黙示録が書かれた当時の教会はローマ皇帝ドミティアヌスの迫害下にありました。この手紙が宛てられたアジアの教会の中には殉教者も出始めていました。また信仰に歩むがために社会的苦難、経済的苦難のもとに置かれる信者たちもいましたし、そのような環境で生き延びるために信仰的に妥協するようにとの強い誘惑の中に彼らはありました。今日の私たちも、黙示録が書かれてから 1900 年以上も経ち、自分たちが思い描く理想からは程遠い状況にあります。世の力が強く見える世俗社会の中、信仰者は一握りで、時には無力感を覚え、主の再臨の約束をリアルに受け止めて生活することに困難を感じる戦いの中にあります。しかしこの黙示録は、神はすべてを支配しておられること、様々な災いや理不尽と思われることも神のご計画の中にちゃんとあることであり、神がその御心を実現実行中であること、そしてついに主が来られて栄光の御国を完成に至らせるこ

とを述べています。その最後の日は近いこと、今すぐにでも主は来得ること、「見よ、わたしはすぐに来る」と主は語っていること、その日が来るのは確実中の確実なことであることをこの書は告げています。私たちはどんな困難や戦いがあっても、この黙示録を心に留めて主に信頼し、主に希望を置き、主に従い続ける歩みへ励まされたいと思います。主と結ばれて益々正しいことを行い、益々聖なる者とされる歩みへ進む者であるように。主は「わたしはすぐに来る」と言っておられ、「それぞれの行いに応じて報いる」と言っておられます。この黙示録をしっかりと心に留めて、どんな状況でも主を待ち望み、ついに来られる主を喜びを持って迎え、栄光の御国へ迎え入れられ、豊かに報われる民の歩みへ導かれたいと思います。